都市と移住民:ジャカルタ在住ミナンカバウの事例

加藤 剛*

Cities and Migrants in Southeast Asia: A Case of Minangkabau Migrants in Jakarta

Tsuyoshi Kato*

The populations of Southeast Asian cities have grown dramatically since the turn of the century, mainly due to the inflow of migrants from the countryside. Despite the numerical importance of migrants in the populations of Southeast Asian cities, little is known about how they live in the new environment. As a conspicuous example of rural-urban migrants

in Indonesia, this paper examines the lives of Minangkabau migrants in Jakarta: their migration patterns, associational activities, and relationship with their native village. It is proposed that more serious attention be paid to the study of migrants in the Southeast Asian city and how they mediate the relationship between city and village.

はじめに

第三世界に属する他の国々におけると同じように、今世紀東南アジアの諸都市にみられる特徴のひとつは、その急速な都市化にある。たとえば、手元にデータのあるフィリピン、タイ、マレーシア、インドネシア、ビルマという五つの国をみても、1950年から1970年にかけて、人口10万以上の都市に住む人々の数は約3倍に増加している(表1)。

東南アジア諸都市のもうひとつの特徴として、単一都市の肥大化現象(いわゆる primate city 現象)がしばしば指摘されるが、都市化の波も各国の首都においてもっとも激

表1 東南アジア諸国の都市人口の推移 (in 1,000)

	1950	1960	1970
Philippines	2, 692	3, 989	6, 140
Thailand	1, 167	1,705	2, 825
Peninsular Malaysia	409	774	1,600
Indonesia	4, 637	9, 082	14,340
Burma	977	1, 194	1,880

Source: ESCAP [1978: 91].

しい。植民地権力に支配されたことがなく, 従って都市の発展過程において植民地権力の 規制を受けなかったタイのバンコクは別にし ても,東南アジアの多くの首都は,前世紀末 ・今世紀初頭以来未曾有の人口膨脹を経験し た。ジャカルタにいたっては,前世紀末以 降40倍以上にも人口がふくれあがっている

^{*} 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

表2 東南アジアにおける首都人口の推移

Greater	110, 669	786, 800	2, 906, 532	4, 546, 492
Jakarta	(1893)	(1930)	(1961)	(1971)
Metropolitan	256, 729	903, 313	2, 426, 488	3, 952, 615
Manila	(1903)	(1939)	(1960)	(1970)
Bangkok-	628, 675	1, 178, 881	2, 136, 435	3, 077, 361
Thon Buri	(1904)	(1947)	(1960)	(1970)
Kuala Lumpur	18,000	175, 000	316, 200	451,728
	(1891)	(1947)	(1957)	(1970)

Sources: Castles [1967: 157, 166, 172], Indonesia, Biro Pusat Statistik [1974: 98], ESCAP [1978: 86], 坪内, 石井 [1982: 310, n. 5], Thailand, National Statistical Office [ca. 1972: 42], ESCAP [1976: 16], McGee [1975: 146], Fell [1960:8], 東南アジア調査会 [1972:6-50].

(表 2)。1)

表 3 東南アジア首都人口 中の移住民の比率

急激な都市
人口の増大
は,都市人口
の自然増加に
よるものでは
なく, すぐれ
て農村から都
市への人口流
入によって引
き起こされ
た。表3の示
すように, 東

	1960	1970
Greater Jakarta	50.4%	40.5%
City of Manila	45.4%	43.1%
Bangkok- Thon Buri	25.4%	29.8%

Sources: Mertens [1976: 87], ESCAP [1978: 46-47], ESCAP [1976: 16-17].

南アジアの大都市においては、人口の30%前 後あるいはそれ以上が, 地方からの移住民に よって占められることも珍しくない。2 へー レン [Heeren 1955: 115] が1954年に行な ったジャカルタでの調査によれば、サンプル

更や数字の信憑性の問題もあると思われるが,

として抽出された10,572人の首 都在住世帯主のうち、実に75% がジャカルタ以外の土地に生ま れた人々であった。3) この数字 は極端なケースであるかもしれ ない。しかし, 東南アジア大都 市人口の少なからぬ部分が、地 方生まれの移住民から構成され ていることは確かで,都市で生 まれた彼らの子供や孫も含める と,都市を「ふるさと」としな い人々の数はさらに増大するで あろう。これもジャカルタの例 であるが,1961年のセンサスに よると, 地方生まれの者は当時

のジャカルタ人口の50%を構成していた。し かし、キャッスルズの推計によると、当時の ジャカルタ人口の77%は広い意味での移住民 で、ジャカルタを「ふるさと」とするバタ ビア族は、わずか23%にすぎない [Castles 1967: 185]。また、1971年センサスをもとに した計算によっても, ジャカルタ人口の3人 にふたりは、移住民ないしその子供であろう と推計されている [Speare 1975: 68]。

東南アジア都市人口の出生地に関するこの ような事実は、ややもすると「人口移動と急 速な都市化」というレッテルのもとにおいて のみ認識され, それ以上の追究がなされるこ とは少ない。しかしながら東南アジアの都 市,なかんずく大都市において,移住民が高 い人口比を占める以上、「都市の移住民」そ れ自体の研究は, 東南アジア都市の諸様相を

される。

¹⁾ 表2のうち、左の2欄の数字は都市境界線の変

この表から全体としての傾向は明らかである。 カッコ内の数字は年号を示す。 2) 表3の数字は、外国生まれの首都人口を除外し て計算した。外国生まれの多くは外国人と想定

³⁾ 華人はこの計算から除外した。独立宣言(1945 年)以前においては,ジャカルタ人口は50万人か ら60万人台であったが、これは対オランダ独立 戦争終結を間近に控えた1948年から急上昇し、 1954年には182万人にまでふくれあがっている [Kantor Sensus dan Statistik D. K. I. Jakarta 1980:17]。ヘーレンの調査結果は、このよう な急激な人口増加を考えずしては理解できな

語る上において必要不可欠なものであろう。 それも、都市移住民の平均年齢、教育程度、 職業、性別に関する人口学的研究や、都市移 住民研究即スラム研究といったアプローチだ けではなく、移住民の生活様式、行動様式に 迫る研究が必要とされる。

本稿では、都市への地理的移動志向の高いインドネシアのミナンカバウ族の事例を検討することにより、親族結合や同郷結合が都市移住民の生活に果たす役割を考えてみたい。より具体的には、私が1980年9月から1981年12月まで滞在したジャカルタのケースを例にとって検討することとする。

I ミナンカバウのジャカルタ進出

現存する世界最大の母系制社会を形成するミナンカバウは、現在の西スマトラ州を故地とし、インドネシアの他地域にも広く移り住んでいる(図1参照)。西スマトラ州自体に300万人、その他のインドネシア諸地域に130万人在住すると推定される(1980年現在)。ミナンカバウはインドネシア諸種族の中でも強固なイスラム教徒として知られ、母系制とな

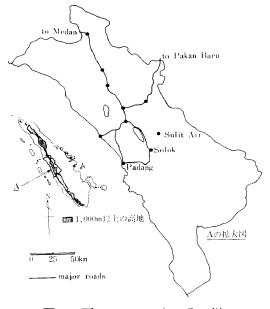


図1 西 ス マ ト ラ 州

らんでムランタウ (merantau) 慣行によっても有名である。ムランタウとは地理的移動 (migration) のことで、広義には知識・富・名声を求めての出村を意味する。

ムランタウは、近年の都市化の進展に伴って生まれた新しい慣行ではない。古のミナンカバウ移住者・開拓者に関する地方伝説は、スマトラのいたるところに存在し、この慣習の古さを物語っている。 コマトラばかりでなく、西マレーシアのヌグリ・スンビラン(Negri Sembilan) も、15、6世紀に始まるミナンカバウの移住によって開拓された[Josselin de Jong 1952: 9, 121]。5)

19世紀以前のムランタウが、主として新天地への開拓移住であったのに対して、西スマトラにオランダ植民地支配が確立された19世紀半ば以降は、ムランタウも出稼ぎの形をとるようになった。貨幣経済の浸透によって、農民としてではなく、商人、教師、中・下級官吏としてのムランタウが可能になったからである。ジャカルタ(当時のバタビア)を目指しての移動が、ミナンカバウにとって社会的に意味をもってくるようになるのも、この時代以後のことである。

ミナンカバウは、移り住んだ先で商人となることで有名であるが、最初にジャカルタへ渡った人々は、恐らく商人ではなく、オランダ語による高等教育の機会を求めた知識人であ

⁴⁾ これらの伝説については、Szekeley-Lulofs [1954:7-8], Neumann [1972:53], Effendy and Effendy [ca. 1972:15-16], Schnitger [1939:39,41], Jaspan [1964:25], Funke [1972:36] を参照。

⁵⁾ なぜミナンカバウが、強いムランタウ志向を有しているのかを、ここで詳しく論じることはできない。農地・家屋敷は女性のものであるため、男は土地に縛りつけられないこと、母系制親族ネットワークは、ムランタウ活動を促進する上で役に立ちうることなど、母系制自体がムランタウ志向と深い係わりをもっている。より詳しくは、Kato [1982: 116] を参照。

ろう。たとえば、1851年に STOVIA (School tot Opleiding van Indische Artsen ——原住民医師養成学校) がジャカルタに開校したが、早くもその5年後の1856年には、ふたりの生徒が西スマトラから入学している。この数は年を追ってふえ、1900年から1914年の間の同校在学生200人のうち、36人がミナンカバウ出身者であった [Graves 1981: 123]。

ミナンカバウ商人のジャカルタ進出が、い つごろから始まるものなのかは確定しがた い。シルンカン (Silungkang) およびスリッ ト・アイル (Sulit Air) という, 昔から出稼 ぎ商人が輩出することで有名な西スマトラの ふたつの村を例にとると、1912年までにはシ ルンカン商人のジャカルタ進出がみられ [Marzali 1973: 101], また1920年以前に, スリット・アイル商人がジャカルタで活躍し ていたことが知られる [Pusat Organisasi Warganegeri Sulit Air ca. 1957: 12]. 1892 年に、蒸気船によるパダン(西スマトラ州都) とジャカルタ間の定期航路が開設されており [Travellers' Official Information Bureau of Netherlands India N.d.: 27, 31], これ以 降知識人だけでなく, 商人たちのジャカルタ 進出意欲も促進されたのであろう。

いずれにしても、オランダ時代にジャカルタへ移動した人は、ミナンカバウの中でも少数派であった。1930年のセンサスによると、409、655人の在ジャカルタ原住民(ヨーロッパ人、華人らは除く)のうち、3、186人がミナンカバウである [Castles 1967: 166]。これは、当時西スマトラ州外に住み着いていた約99、000人のミナンカバウ人口のうち、3.2%を占めるにすぎない [Kato 1982: 127-128]。ミナンカバウ出身の著名なイスラーム指導者、故ハムカの自叙伝によっても [Hamka 1966: 42]、ミナンカバウにとって「ジャワは、まだまだ遠くの地であった」のである。インドネシア独立後のセンサスは、政治的

理由によって種族別の人口数を数えていな い。しかしながら、出生地別のジャカルタ人 口の統計によると、ミナンカバウの故地であ る西スマトラ州生まれのジャカルタ居住者 は, 1961年には43,136人 [Castles 1967: 172], 1971年には80,612人いたと記録されて いる [Indonesia, Biro Pusat Statistik 1974: 977。6) ジャカルタで生まれたミナンカバウ や、西スマトラ州外で生まれやがてジャカ ルタに移り住んだミナンカバウの存在も考え ると, 在ジャカルタ・ミナンカバウ人口は, 上記の数字をはるかに上まわるはずである。 キャッスルズは、1930年と1961年のセンサス をもとにして、1961年のジャカルタ在住ミナ ンカバウ人口を,約60,100人と推定している [Castles 1967: 185]。またナイムは、ジャカ ルタ・ミナンカバウ社会の指導者たちとのイ ンタヴューをもとにして,1970年代初頭のジ ャカルタ在住ミナンカバウ人口を、約50万人 と推計した [Naim 1979: 116]。これは当時 のジャカルタ人口の10%にあたる。ナイムの 推計値は過大であると思われるが,独立後, 特に1961年以降、ミナンカバウのジャカル タ進出が飛躍的に増大し,いまではジャカル タがミナンカバウの地理的移動の最重要目的 地となっていることは間違いない [Murad 1980:52-53]。私が1972年から1973年にかけ て行なった西スマトラの四つの村の調査にお いても、この傾向ははっきりあらわれてお り,1961年から1971年の間に調査村をあとに した人々のうち、34%はジャカルタを目指し た人々であった [Kato 1982: 145-146]。

ジャカルタへ移動する人の増大とともに、 次のような変化もみられた。まず、オランダ 時代とくらべて、西スマトラの村をあとにす

^{6) 1930}年センサスによると, 西スマトラ州人口の 91%がミナンカバウであり, 1961年および1971 年センサスにおける「西スマトラ生まれ」のほとんど総てが, 種族的にもミナンカバウであったと思われる。

る人の数が急上昇した。さらに、独立後の移動の波は主として都市に向けられ、中でもジャカルタ、バンドゥン、パカンバル、メダン、パレンバンの五つの大都市に集中している。

もうひとつの変化は、いわゆる出稼ぎから移住への移行である。オランダ時代の移動は、男子単身による主に行商を中心とする中・近距離出稼ぎであり、年に1、2度、特に米の収穫期やレバラン(Lebaran—断食明けの聖祭)には、一時帰郷するのが常であった。しかし、独立後は、長期定着を目的とする遠距離都市への核家族ぐるみの移住が一般的となっている。ミナンカバウのいう、中国風ムランタウ(merantau Cino)である。か大消費人口をかかえる都市の出現により、行商にしる露天商にしろ、定着的な商いが可能になり、ひいては核家族による移住が可能となった。

上の諸変化は, 特に1958年の PRRI (Pemerintah Revolusioner Republik Indonesia ――インドネシア共和国革命政府)事件後に 顕著である。PRRI 事件は、西スマトラを中 心に起こった反乱で, 反ジャワ・反スカルノ ・反共産主義を標榜した。反乱は即座に鎮圧 されたが、一部のゲリラ活動は1961年まで続 いた。反乱後の西スマトラは、ジャワ人を主 力とする中央政府軍の制圧下に置かれた。西 スマトラに住んでいること自体が、ミナンカ バウには重苦しく感じられる時代であり、反 乱軍に共鳴,加担した者にとっては,身の安 全に不安を感じる時代でもあった。こうした 事情ゆえに, 当時多くのミナンカバウが, 就 業機会も多く匿名性の高い大都市を目指し、 家族、親族を頼って西スマトラをあとにした といわれている。8)ある調査によると、1958年 から1971年の間に,推定54,000から60,000人のミナンカバウが,西スマトラからジャカルタに渡った [Fritz ca.1972:75]。

Ⅱ 同 郷 会

ミナンカバウが村をあとにする場合、孤立 した個として都市への移動を経験するのでも なければ、「都市移住民」といった、統計的範 疇にくくられる集合体として, この移動を経 験するのでもない。都市への移動、そして都 市生活への参入は、村での社会的ネットワ ークの延長線上に存在する, 私的かつ親密 (intimate) な脈絡の中で起こる。彼らはあて もなく村を出るわけではなく, 通常, 親類, 同村出身者を頼って都市へと出かけていく。 自ら頼っていく場合もあれば, 出てきたらど うかと誘われていく場合もある。最初は、目 的地にすでに定着している縁者の家に居候を し (menumpang), しばしば居候先の主人 に生計の道を教示してもらう。経済的にある 程度自立できるようになると、居候先の近く に別個の住居を定める。

このようにして広いジャカルタ市内にも, 西スマトラの出身村別に居住地区がかたまっ ている例が多い。⁹⁾ また同じ村の出身者で も,移住先の都市ごとに主要生業が異なるこ とさえある。たとえば,前述のスリット・ア イル村出身者のうち,ジャカルタ在住者は文 房具や書籍の商いをしている者が多いが,メ ダンでは菓子の製造と行商が中心である。これは,スリット・アイル出身の先駆者が,これでれの土地でなにを生業としたかの違いによる。これなどは,血縁や地縁が,ムランタウ(地理的移動) 慣行の中でどのような機能

⁷⁾ 華僑のように、帰郷・望郷の念が強いにもかか わらず、めったに村に帰らないムランタウ形態 を指す。

^{8) &}quot;Harun Zain: Fondasi, Menjelang Isi," Tempo, 8 October 1977, p. 19を参照。

⁹⁾ ジャカルタ市の五つの行政地区のうち,一般に ミナンカバウは,市場などが集中している中央 ジャカルタ (Jakarta Pusat) と南ジャカルタ (Jakarta Selatan) のいずれかに,仕事と生活 の場をもっている。

を果たしているかの良い例証であろう。10)

西スマトラでは、古くから同一村内で結婚することが一般的であり、何世代かの間には、同一村出身者の間に姻戚関係が重層的に広がっている。従って、上記のような親類縁者を頼ってのムランタウ形態は、人数その他の条件が満たされれば、ムランタウ目的地において、出身村単位の同郷会(ikatan keluarga または persatuan keluarga)が形成される可能性を常に内包している。そして、移住民としてジャカルタその他の都市に住むミナンカバウにとって、同郷会こそが、フォーマルな組織としてはもっとも身近で重要なものである。

同郷会の組織化は、オランダ時代はあまり 活発ではなかった。村をあとにする人の数も 比較的少なく、また彼らの多くは週市、地方 中小都市間を渡り歩く行商人であったため、 同郷会的組織をつくることが困難であった。 村をあとにする人の出稼ぎ志向も、同郷会の 形成を鈍化させる要因であった。村を出る人 はおおむね単身の男子で、半年、1年、ある いは少なくとも2年に1度は一時帰郷をする のが習いであり、移動先に住み着くことを目 的とはしていなかった。村に留まる人、村を あとにする人の両者にとって、村こそが自己 の社会的存在の中心であったといえる。

独立後にみる,男子単身出稼ぎから核家族 移住への志向転換,そして移住者の増加と少 数大都市への集中という変化は,オランダ時 代とは比較にならないほど同郷会の組織化を 促進した。移住者とその家族の生活舞台が村 から都市に移ったということは,経済的側面 ばかりでなく,結婚式,葬式の遂行といった 慣習法の領域においても,互助活動の必要性 が増大したことを意味している。こうした機能を担ったものが,同郷会にほかならない。

同郷会の組織化を促したもうひとつの要因として、先の PRRI 事件があげられる。反乱の挫折による屈辱感、そしてその後の社会的・政治的辛苦という共通体験を通して、ました。 これがり移住者の間で親族・同村出身者間の結束がかたまっていった。 たとえば、反乱の結果、ジャカルタと西スマトラ間の連絡がいれば、当時ジャカルタで勉強していたまだいの学生は、親からの仕送りがストトップするという事態に遭遇した。こうした困難も、同郷者が互助団体を組織して解決したという。現在ジャカルタにいくつのミナンカバウ同郷会があるのか定かではないが、その大部分が、PRRI 事件 (1958-1961年) 以降に設立されたものといってよい。

通常同一村からの移住者が多い場合には、村単位の同郷会を形成する。人数的にこれが不可能である場合には、西スマトラ内の同一郡 (kecamatan)、あるいは同一県 (kabupaten)の出身者同士で同郷会を形成する。地方小都市などで、西スマトラ出身者が少なく、県単位の同郷会の設立さえ不可能な場合には、全ミナンカバウ出身者のための同郷会がつくられたりもする。このように、同郷会結合の基底には、単に同郷意識や重層的姻戚関係だけでなく、ミナンカバウの種族意識も強く働いている。11)

現在ジャカルタには,在ジャカルタ・ミナンカバウ社会全体を代表する機関として,

¹⁰⁾ 親族や同村の繋がりを通して生業への手ほどき を受けるにもかかわらず、こうした繋がりをも とに共同事業を始めることは、ミナンカバウの 間では皆無といってよい。

¹¹⁾たとえば、あとに述べるスリット・アイル村同郷会の規約は、その序文において次のように謳っている——「われわれは以下のことを十全に自覚するものである。即ち、スリット・アイル人は、ミナンカバウ社会の一員としてミナンカバウの慣習法や風俗習慣を心から尊重し、かつまたイスラーム教を篤く信仰するものである」[Panitia Musyawarah Besar Keluarga Sulit Air Sepakat Ke VII 1981: 12]。

BKKKAM (Badan Koordinasi Kesenian Kebudayaan Alam Minangkabau——「ミナ ンカバウ世界」芸術・文化連絡協議会)と, 在ジャカルタ・西スマトラ州連絡事務所があ る。12) 前者は、ジャカルタ在住ミナンカバウ 有力者ならびに知名人が組織した団体で,毎 年断食明けにスナヤン公会堂で行われるミナ ンカバウ全体のためのレバラン祭は、この組 織の企画による。後者は, インドネシア各州 が中央政府との連絡円滑化のために設けてい る機関のひとつで,公式任務はあくまでも 中央政府との事務連絡にある。しかしなが ら, 在ジャカルタ・ミナンカバウ学生の任意 団体である KMM (Kumpulan Mahasiswa Minangkabau — ミナンカバウ学生協会) が, この連絡事務所に本部を間借りしている こと, また在ジャカルタ・ミナンカバウは, この事務所をジャカルタにおける自分たちの 利益を保護すべき「ミナンカバウ大使館」と もみなしていることからもわかるように、西 スマトラ州連絡事務所も、ジャカルタのミナ ンカバウ社会と密接な関係を保っている。

上の組織のほかにも、ミナンカバウの伝統的踊りや音楽を演ずるための組織、ミナンカバウ出身の高級官僚・知識人の夫人たちの集い、スポーツ・クラブ、ミナンカバウ・アナウンサー協会など、種族意識に根ざした組織が数々ある。¹³⁾ しかし、なんといっても、ジャ

カルタ在住ミナンカバウの日常生活にもっと も関係が深く,また結束力のかたい組織は, 出身村ごとの同郷会である。

Ⅲ スリット・アイル村同郷会

同郷会の具体的な活動について,私がジャカルタでしばらく行き来のあった,スリット・アイル村同郷会の例を引いて考えてみよう。¹⁴)

スリット・アイルは、ミナンカバウ文化の中心地である西スマトラ内陸高地に位置する(図1参照)。田畑、居住地、森林をあわせたこの村の面積は2,710~クタールであるが、スリット(困難)・アイル(水)という村の名前が示すように、水田耕作が一般的な西スマトラ内陸部の中では、水田面積の拡張が難しい土地柄である。そのためかどうか、昔から生活のために村を出る人が多いことで有名であり、また同郷会活動が盛んなことでも知られている。

1980年のセンサスによると、村内人口は 11,141人である。1961年の人口数が10,849 人、1971年が11,642人であるから、この20年 間にはわずかの人口増があったとはいうもの の、この10年間だけをとると、村外への過度 の人口流出によって、村人口は減少したこと になる。村内人口の3倍近くの人が、現在村

¹²⁾ 後者の正式名称は、Kantor Promosi Pembangunan Daerah Tingkat I Sumatera Barat (西スマトラ州地域開発推進事務所) である。1977年以前は、Kantor Perwakilan Daerah Tingkat I Sumatera Barat (西スマトラ州代表部事務所) と呼ばれた。名称変更は、内務省の指示による。

¹³⁾ これらの組織の例としては、次のようなものがある。Kesenian Minang Rantak Kudo (「ランタック・クド」ミナン芸能グループ) は、テレビ、ホテル、ミナンカバウ族の結婚式などで、ミナンカバウの伝統的踊りや音楽を演じる。Yayasan Bunda (母協会) は、アダム・マリク副大統領夫人(1981年当時)の主宰する集ま

りで、主としてミナンカバウ・エリート階層の 夫人たちがメンバーとなっている。 Gumarang (ミナンカバウの口承物語 Cindua Mato に出 てくる馬の名前) は、ジャカルタのサッカー・ リーグに加盟しているミナンカバウ・チームで ある。 Tuah Sekato Penyiar Minang Jakarta (ジャカルタ・ミナン・アナウンサー協会「ト ッア・スカト」) は、ミナンカバウ語によるラジ オ放送番組の関係者の集まりである。 ジャカル タには、現在18のこうした放送番組がある。

^{14) 1980}年12月から1981年8月まで、ジャカルタの スリット・アイル村出身者と比較的親密な行き 来をすることができた。

の外に出て生活しているといわれるが、この話もあながち誇張とは思われない。ジャカルタのみに限っても、推定8,000人のスリット・アイル出身者が生活しているという(1981年現在)。

スリット・アイル村の同郷会は、スリット ・アイル・スパカット (Sulit Air Sepakat ースリット・アイル一致団結)と呼ばれ, 略称 ŠAŜ という。早くも1918年に,西スマ トラ州の州都パダンで結成された。その後い ろいろな名称のもとに漸次インドネシア各地 に同郷会がつくられるようになったが,1970 年以降, 村外在住者の協議の結果, SAS をス リット・アイル同郷会の正式名称として採用 し、ジャカルタには各地支部を統轄するため の中央執行部 (Dewan Pimpinan Pusat) が設けられた。中央執行部役員は、2年に1 度村で開かれる SAS 総会 (Musyawarah Besar Keluarga SAS) において,全国 SAS 支部代表役員の合議によって改選される。 SAS の最盛時の1970年代半ばには、インド ネシア全土の主だった都市に59の SAS 支部 を数えた。その後, SAS 中央執行部を統率 していた強力な指導者が引退したため、活動 が低下した。1981年現在では、37の SAS 支 部が存在する。パカンバル,パレンバン,パ ダンなどの支部は、集会のための家を所有し ており, ジョクジャカルタ支部にいたって は、スリット・アイル村出身者のための学生 寮をも有している。これらの資産は、ほとん ど総て篤志家の寄贈によるものである。ジャ カルタ自体は広大であり,かつまた居住者も 多いために、ジャカルタの居住地区別に10の 支部が存在するが、そのうちのひとつは集会 所を保有している。15)

同郷会の定期的活動としては、もちまわりによって月に1回、集会所ないし金持会員宅で開かれるムンガジ (mengaji—イスラームの説教会) がある。夜8時ごろから10時過

ぎ、時には11時近くまで開かれる会には、イスラームに造詣の深い講師(同郷者でないことが多い)を招き、宗教について話をしてもらう。コーランの朗唱と祈りのあと、最後に軽食と飲みものが供される。一度に集まる人数は確定しがたいが、私が何回か出席した会には、50人前後が参加していた。男女ほぼ同数で、小学生くらいの子供から年寄りまでを含む。

ムンガジのあとに、信用組合(koperasi)活動が行われることもある。これは金持会員の寄付金と、信用組合員(同郷会メンバーのうちの希望者)の月会費をもとにして、商売の資本などを低利で希望組合員に貸しつける制度である。貸金の焦げつきで組合はよく崩壊するが、にもかかわらず盛んである。

信用組合活動とは別に、通常女性を中心として定期的に開かれるものにアリサン (arisan) がある。ムンガジのあとに行われることもあれば、これとは別に開かれることもある。アリサンは10人前後の女性を中心として行われる無尽講で、毎月なにがしかの金をプールし、くじ引でプールした金を使う順番を決める。たとえば、10人がひとつのアリサンのメンバーで、1カ月の会費が5,000ルピア(1981年当時の公定レートで約2,000円)だとする。毎月プールされる50,000ルピアを使う権利は、月ごとのくじ引で決定される。一度くじにあたると、翌月からはくじ引には参

¹⁵⁾ SAS の会員資格についていえば、スリット・アイル人を親にもつ者は、自動的に SAS の会員となる。20年ほど前までは、両親ともスリット・アイル出身者であることが必要とされたが、現在では、片親のみがスリット・アイル人でもSAS の会員となれる。会員証の発行や会員費の徴収はない。なお、SAS のように、名称の統一や中央執行部の設置といった同郷会組織の全国的統制をはかっているケースは少ない。しかし、以下に述べる SAS の活動は、ミナンカバウのどの同郷会も、程度の差はあれ、いずれも従事している活動である。

加しない。10カ月がすぎ、プールされた金を使う機会が全メンバーに一巡したところで、同じアリサン・メンバーで継続するか、あるいは新規のメンバーで新しいアリサンを開始する。

アリサンは社交の場でもあり、メンバー宅をもちまわりで開かれる。食事が供され、同村出身者についてのゴシップ、村についてのゴシップの交換や、割安商品をもち寄っての掛売りなども行われる。なお、アリサンはジャカルタの女性の間で非常に盛んで、スリット・アイルの女性の場合も、特に経済的に余裕のある人はひとりでいくつものアリサンに加入している。16)

1年に1度と回数は少ないが、同郷会の定期的活動として重要なものに、日本の正月にも相当するレバランがある。家族、親族、氏族、同郷会と、種々のレベルにおいて、何回にもわたってお祝いの会がもたれる。¹⁷⁾

SAS の不定期な活動としては、会員間の親睦を促進するための雑誌の出版がある。雑誌は、いくつかの SAS 支部でいろいろな名前のもとに出版されているが、もっとも代表的なものは、SAS 中央執行部出版の『SASの声』(Suara SAS)である。月刊誌というたてまえであるが、現実には途切れ途切れにしか出版されていない。SAS は会員費といった経常収入をもたず、また雑誌の編集者も無料奉仕であるため、会員へ無料配布されるこの雑誌を、定期的に出版することは容易でない。

定期的ではないが恒常的な活動として重要 なものに,結婚式,葬式,災難時(家や店舗 の焼失など)における互助活動がある。経済 的支援であることもあれば、精神的支援、労力による支援であることもある。たとえば 1981年に、スリット・アイル出身者の間で非常に尊敬されていた実業家がジャカルタで亡くなった。この時にも、葬式のため2,000人近くの同郷者がその日のうちに集まったといわれ、またその後供養のため3日間続いた故人宅でのムンガジも、毎晩盛会であった。

SAS のほかに、スリット・アイルの組織としては IPPSA (Ikatan Pemuda Pelajar Sulit Air—スリット・アイル青年・学生連合)がある。これは、青年男女(中・高校生から30歳前後まで)のための組織で、SASと行動をともにしながらも自律性の高い組織である。SAS と同じように各地に支部をもち、その活動はピクニックやスポーツ大会の立案・実行、そしてムンガジ月例会の開催である。IPPSA も不定期ながら機関誌を出版している。

SAS や IPPSA といった同郷会の活動へ の参加は,常に重層的に考えられなければな らない。SAS や IPPSA はフォーマルな組 織であるが、そのインフォーマルな基盤と して、在ジャカルタの兄弟姉妹、近い親戚と の日常的なつきあいやアリサンがあり, 出身 氏族ごとのつきあいや,ジャカルタで近隣に 住む SAS 会員との近所づきあいがある。フ ォーマルな組織がインフォーマルなつきあい を招来するのではなく,成立過程・成立基盤 において,後者を前提として前者が初めて成 り立つ。いわばインフォーマルなつきあいの 網の目の上に、SAS や IPPSA がのっかっ ている。たとえある家族や会員が、SAS や IPPSA の会合にめったに出席しないとして も, 在ジャカルタ・スリット・**アイ**ル社会, そしてさらには出身村をも繋ぐ情報網の中に は,彼らも例外なく組み込まれている。

同郷者間の互助活動と連帯感の強化, ある

¹⁶⁾ アリサンが形成される基盤としては、兄弟姉妹、 親族、同村出身者のほかに、近所づきあい、職 場仲間、職場仲間の夫人たちなどがある。

¹⁷⁾ スリット・アイルには四つの母系氏族 (suku) があり、その下には100以上の小氏族 (payung) が存在する。 ジャカルタでの氏族のつきあいは、この小氏族のレベルである。

いはのちに述べる出身村との緊密化だけではなく、SAS や IPPSA の隠れた機能のひとつは、インフォーマルな婚姻規制にある。SAS 会員の間では常に年ごろの青年男女に対する気配りがあり、暗黙のうちにスリット・アイル出身者同士が結婚するよう配慮がなされている。IPPSA が組織するピクニックやスポーツ大会(通常サッカー、バレー・ボール、ピンポン)も、スリット・アイル村出身の青年男女がお互いに出会い、知り合う機会を提供することに隠れた意義がある。

現実に、ジャカルタ在住のスリット・アイル出身者の間では、昔ながらの同村内婚の慣習が大方の場合いまだに守られている。このことは重要である。同郷会というフォーマルな組織の基礎は、特定の政治的主義主張や経済的利害関係ではなく、上にも述べた通り、親戚、兄弟間の日常的なつきあいである。同村内婚志向が順守され、他村出身者、他種族出身者といった「異分子の闖入」が少ないほど、何重にも広がる姻戚関係を通じて同郷会活動への参加が促進され、またスリット・アイル社会としての移住者に対する規制力が働くからである。18)

これまでの説明は、ジャカルタのスリット・アイル社会内部の活動についてであったが、ここで忘れてならないものに出身村との関係がある。村の外に出て働いている人たちの、村の経済への貢献度は目覚しい。少なくとも1年に1度、スリット・アイルの村長はジャカルタを訪れるが、その目的のひとつ

は、SAS の指導者に村の開発計画を説明し資金援助を要請することにある。村の水道、モスク、学校といった公共施設のほとんどが、SAS 会員の寄付金により建設・運営されている。従って村長の手腕のひとつは、SAS 指導者といかに協調関係を保っていけるかにある。SAS 指導者が、村長選挙における候補者の人選に介入することも、頻繁に起こる。

村外からの、村に残っている親類縁者への 送金も盛んである。送金は、郵便為替(為替 が多いため、西スマトラには珍しく、この村 には郵便局の分局がある) ないし一時帰郷者 へ仕送りを委託する形でなされる。1981年に 私がこの村を訪れた時、村役場の壁に村内就 業者の職業構成表が貼られていたが,一番重 要な職業カテゴリーは,農業(村内就業人口 の13%) でも商業(同21%)でもなく, 「送金受 領」(同44%)であった!1980年の1年間で、 5,144万ルピア (当時の公定レートで約 U.S. **\$83,**640) の金が,郵便為替を通じて村外か らスリット・アイルに流れている。一時帰郷 者へ託した金を含めると、この倍近くの額に はなるであろうと村では聞かされた。村外か らの送金なくしては、スリット・アイル村の 生活水準は著しく低下するであろう。19)

村との繋がりは、単に経済的側面のみに限られない。人の交流も盛んである。SAS とIPPSA は、2年に1度レバラン時に村でそれぞれ総会を開き、なるべく多くの人が帰郷するよう配慮している。たとえば IPPSA は、「ともに帰ろう」(pulang basamo) という呼びかけのもとに、ジャカルタ、スリット・アイル間のバスを数台チャーターし、会員の総会出席の便宜をはかっている。これは単に帰郷費用の節約のためだけでなく、ジャカルタ生まれの青年男女も、友達と連れ立って気

¹⁸⁾ 同村内婚の慣習は,ジャカルタのミナンカバウ社会でもいまだに一般的なようである。スリット・アイルは特にこの傾向が強く,1981年に SAS のジャカルタ支部のひとつで行なった私の調査によると,同村内婚は93% (n=43)となっている。1960年ごろまでは,村外出身者との結婚に対して,村八分といったフォーマルな制裁がスリット・アイル人の間では加えられていた。

¹⁹⁾ 都市からの送金は、スンダやジャワの農村の場合も大きな意味をもっている [Hugo 1981: 264-285; Jellinek 1977: 70]。

楽に自分のふるさとをみることができるよう にとの配慮からである。

SAS 総会や IPPSA 総会の開催の有無にかかわらず、レバランの時期には一時帰郷者が多い。そしてレバランとその後約2週間は、結婚式ラッシュの時期でもある。結婚式は、一時帰郷した若者と村娘との「見合い結婚」によるものが多い。²⁰⁾

レバラン以外の時期にも、ジャカルタその 他の都市から村に一時帰郷する者が必ずい る。逆に、村からジャカルタへ「上京」して くる年寄り, オバ・オジもいる。手紙のやり とりもある。村で起こった「事件」は、1日, 2日のうちに、「歩くラジオ」(radio dengkul ――ゴシップ好きの女性)を通じて,ジャカ ルタのスリット・アイル社会に伝わり, その また逆もしかりであるといわれるほどに,村 と村外に住む SAS 社会との情報網は密であ る。そして,何世代にもわたる同村内婚の慣 習は、こうした情報網をさらに密度の濃いも のとしている。ある意味でこの情報網の存在 こそが、SAS の結束力をもたらし、SASと村 との関係を強化し、SAS の人々をして村の 親戚に対する送金へと駆り立てる源なのかも しれない。

ジャカルタのスリット・アイル社会においては、この10年ほどの間に、「ミナン僑」(Minangkiauw)の増加や他村出身者、他種族出身者との結婚の漸増といった、社会的変化の兆しがみられる。²¹⁾ ジャカルタに住むス

リット・アイルの人々にとって、村ははるかかなたに遠い。多様性そのものの都市ジャカルタには、同郷仲間以外にも、己の準拠集団となりうる多くの対象が存在する。それは職業仲間、学校仲間、あるいは近所仲間であるかもしれない。しかしながら SAS 会員の多くにとって、郷里の村を抜きにして、ジャカルタにおける自己の存在を考えることは不可能であろう。何年、何十年ジャカルタに滞在しようと、彼らはジャカルタ人、インドネシア人であるよりも、まずスリット・アイル人であり、ミナンカバウ人なのである。

従来の都市研究は,地方から都市への人口 移動を、都市と農村との対比のもとに把握し ようとする傾向にある。農村と比較した場 合,都市は、その物理的環境、経済構造にお いて異なるだけでなく, 人間関係, 生活様 式, そしてそこに住む人々の思考様式, 行動 様式においても異質であるとされる [Wirth 1938]。従って、農村から都市への移動は、 単に住むところを変えるだけではなく、住む 「世界」をも変えることを意味している。こ のような枠組みのもとに都市移住民を考察す る場合,われわれがまず問題とするのは,彼 らの都市生活への個人的適応・不適応であ り、村人から都会人への変革過程である。そ して研究者の関心は,都市環境の内部で起こ る社会現象にのみ向けられる。

こうした取組み方に対して,「都市の村人」 (urban villagers) [Gans 1962] や「都市 の農村化」 (ruralization of city) [Abu-Lughod 1961: 23] という概念が提出され, 移住民が都市に「むら的社会空間」(たとえ ば同郷者同士かたまって住むこと)を形成す る事象も指摘されたが,これらの概念も,移 住民を都市の脈絡の中でのみ考えていること

²⁰⁾ これらの結婚は、一時帰郷の男子と村娘の間の 結婚にほぼ限定される。都会に住む娘が、一時 帰郷をして田舎の青年と結婚するケースはまず ない。従って、村外にいる女性にとって、同村 内婚の可能性は仲間の男性よりも低く、逆に他 村出身者、他種族出身者との結婚の可能性がふ える。

²¹⁾ ミナン僑とは、華僑 (Hoakiauw) をもじった 言葉で、移住地に根をおろした人々、そして移 住地生まれの「2世・3世」のミナンカバウを 指す。ここに述べた変化の動向とその社会的影

響を探ることは、今後のミナンカバウ移住民研究の重要な課題である。

に変りはない。

ジャカルタ在住スリット・アイル人の事例は、都市移住民を、都市という彼らの直接的な生活空間内に閉じ込めたり、あるいは、「村人から都会人へ」という変革過程の連続線上にあてはめて考えようとする限り、彼らの行動様式、思考様式を十分に理解できるものではないことを示唆している。交通・通信手段が発達し、都市と村との交流がますます緊密化しつつある今日、都市移住民の研究も、より多次元的、多局面的なものとならざるをえないであろう。

おわりに

母系制という単系親族制度においては、双系制とくらべると、一般に血縁にもとづく集団形成が容易である。ミナンカバウの村では昔からの同村内婚の慣習により、親族集団の結束はさらに強固なものとなっている。PRRI事件という苦い共通体験は、同郷会の組織化を促進する上で多大の影響があった。このようなことを考えると、スリット・アイルやミナンカバウのケースは、都市の移住民を考察するためには、あまりにも例外的な事例であるのかもしれない。

東南アジアの都市化は、「擬似都市化」 (pseudo urbanization) [McGee 1967: 17], あるいは「工業化なき都市化」 (urbanization without industrialization) といわれるように、工業化による就業機会の増大によって引き起こされたものではない。確かに、「ジャカルタに行けばなんとかなる」と思わせるほどに、都市には数々の生計の道がある。しかしそれは、屑ひろい、行商、煙草ひろい、メイド、運転手、レストランの給仕といったいわゆる雑業であり、職業斡旋所や新聞の求人欄を頼りに得られる仕事でもなければ、雇用規約の整っている仕事でもない。村から都市

へと出てくる人は、就業の保証もなく、失業・疾病に際しても、社会保障制度のない「冷たい都会」環境の中で生活しなければならない。このような状況下で、仕事を探し、あるいは生活苦を凌ぐ上で、もっとも頼りとなるものは親族の繋がりであり、出身村の繋がり、そしてより広くは種族の繋がりにほかならない。

インドネシアといわず東南アジアの国々は、多種族・多民族の国である。そしてそこでは、村や地方は特定の種族、民族、言語集団、あるいは宗教と深く結びついている。ひるがえって、東南アジアには、「人種のるつぼ」(racial melting pot)といった、同化(assimilation)を唱道する内在的なイデオロギーもなければ、同化の目標となるような「国民文化(national culture)」も存在しない。

東南アジアの都市に住む移住民は、自己の種族的・民族的背景を携えて都市へ出かけていく。多種族・多民族国家という現実を、もっとも直截的に具現しているのが都市、なかんずく大都市である。ギアツは「インドネシアの都市ほど、『複合社会』(plural society)という言葉があてはまるケースはない」[Geertz 1967: 34]といったが、これはなにもインドネシアに限られたことではない。東南アジアの都市は、そこに住む人々の種族意識、民族意識を醸成しないではおかないような環境をつくりあげている。

ジャカルタ在住ミナンカバウ社会にみる親 族間の互助活動、同郷会組織、そして種族意 識の発露(たとえば前述のスナヤン公会堂で 開かれるレバランの集い)も、上のような東 南アジア大都市の一般的性格と関連づけて評 価されなければならない。つまり、東南アジ アの都市の特徴を考えた場合、ミナンカバウ の事例は極端なケースであるかもしれない が、しかし、決して例外的なケースではない のである。事実ジャカルタのみについていえ ば、他の種族、他の地域出身者の間にも、たとえ程度の差はあれ、ミナンカバウと同じような互助活動の存在や、時には同郷会の存在が知られている。²²⁾

ミナンカバウの事例を通して,私が東南アジアの都市研究に関して指摘したいことは,従来都市における親族結合,同郷結合,あるいは種族意識といった問題が,十分学問的な関心を呼ばなかったことであり,また都市と農村の研究が,しばしば相互無関心・相互無干渉の状態で行われたため,都市と農村との有機的関係の解明がなされなかったことである。いずれの場合においても,「都市の移住民」は,研究上戦略的に重要な位置を占める調査対象だといえる。

「都市の移住民」の研究は、単に人類学や 社会学的研究関心を満たすためだけのもので はなく、都市から農村への富の再分配や、多 種族・多民族国家の国民国家 (nation state) 的統合の将来を考える上でも, 示唆的であろ う。ある意味で都市移住民は,中央政府が達 成する以上の富を都市から農村に還元してお り, また都市移住民を媒介とした都市と農村 間の有機的繋がりは、「貧しき農村」と「奢 侈文化」の飾り窓である大都市との,政治的 ・心理的反目を軽減ないし隠蔽する機能をも 果たしている。政治面からいえば、権力の中 心である東南アジア大都市に住む移住民は、 多種族・多民族国家にとって実験的ともいえ る状況の最前線(種族的に多様性そのものの 都市)に生活しており、彼らの種族的・民族 的アイデンティティの変容(あるいはその欠 如)を知ることは、国民国家的統合の心理 的,文化的基盤を究明する上で,大切な手が かりを与えてくれるのではないだろうか。

参考文献

- Abu-Lughod, Janet. 1961. Migrant Adjustment to City Life: The Egyptian Case. *The American Journal of Sociology* 67(1): 22-32.
- Amali, Jurhan. 1970. Masjarakat Gorontalo di Tandjung Priok. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Ratulangi.
- Bruner, Edward M. 1972. Batak Ethnic Associations in Three Indonesian Cities. Southwestern Journal of Anthropology 28(3): 207-229.
- . 1974. The Expression of Ethnicity in Indonesia. In *Urban Ethnicity*, edited by Abner Cohen. London: Tavistock Publications.
- Castles, Lance. 1967. The Ethnic Profile of Jakarta. *Indonesia* 3(April): 153-204.
- Effendy, Tenas; and Effendy, Nahar. ca. 1972. Lintasan Sejarah Kerajaan Siak Sri Indrapura. Pekanbaru: Badan Pembina Kesenian Daerah Propinsi Riau.
- ESCAP. 1976. *Population of Thailand*. ESCAP Country Monograph Series No. 3. Bangkok: ESCAP.
- ESCAP Country Monograph Series No. 5. Bangkok: ESCAP.
- Fell, H. 1960. 1957 Population Census of the Federation of Malaya. Report No. 14. Kuala Lumpur: Department of Statistics.
- Fritz, Joachim. ca. 1972. Infrastructure of West Sumatra. Report of West Sumatra Regional Planning Study. Bonn and Jakarta: West Sumatra Regional Planning Study.
- Funke, W. W. 1972. Abung. In Ethnic Groups of Insular Southeast Asia Volume 1: Indonesia, Andaman Islands, and Madagascar, edited and compiled by Frank M. Lebar. New Haven: Human Relations Area Files.
- Gans, Herbert J. 1962. The Urban Villagers: Group and Class in the Life of Italian-Americans. New York: The Free Press.
- Geertz, Hildred. 1967. Indonesian Cultures and Communities. In *Indonesia*, edited by Ruth T. McVey. New Haven: Human Relations Area Files.
- Graves, Elizabeth E. 1981. The Minangkabau Response to Dutch Colonial Rule in the Nineteenth Century. Ithaca, N. Y.: Cornell

²²⁾ たとえば、Amali [1970], Bruner [1972; 1974], Hugo [1981], Jellinek [1977; 1978], Lobarnebal [1973], Pandjaitan [1977], Roosmalawati [1979], Sis [1970], Suparlan [1963] を 参照。

- Modern Indonesia Project.
- Hamka (Haji Abdul Malik Karim Amrullah). 1966. *Kenang-Kenangan Hidup*. 2nd Ed. Kuala Lumpur: Pustaka Antara.
- Heeren, H. J., ed. 1955. Urbanisasi Djakarta. Ekonomi dan Keuangan Indonesia 2(3): 107-151.
- Hugo, Graeme J. 1981. Population Mobility in West Java. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Indonesia, Biro Pusat Statistik. 1974. Sensus Penduduk 1971: Penduduk D. K. I. Jakarta Raya. Seri E No. 09. Jakarta: Biro Pusat Statistik.
- Jaspan, M. A. 1964. From Patriliny to Matriliny: Structural Change among Redjang of Southwest Sumatra. Unpublished Ph. D. Dissertation. Australian National University.
- Jellinek, Lea. 1977. The Pondok of Jakarta. Bulletin of Indonesian Economic Studies 13 (3): 67-71.
- ———. 1978. Circular Migration and the *Pondok*Dwelling System: A Case Study of IceCream Traders in Jakarta. In *Food*, *Shelter*and Transport in Southeast Asia and the
 Pacific, edited by P. Rimmer, T. G. McGee
 and D. Drakakis-Smith. Canberra: Australian
 National University.
- Josselin de Jong, P. E. de. 1952. Minangkabau and Negri Sembilan: Socio-Political Structure in Indonesia. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Kantor Sensus dan Statistik D. K. I. Jakarta. 1980. *Jakarta dalam Angka 1979*. Jakarta: Kantor Sensus dan Statistik D. K. I. Jakarta.
- Kato, Tsuyoshi. 1982. Matriliny and Migration: Evolving Minangkabau Traditions in Indonesia. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press.
- Lobarnebal, Sudja'i Zak. 1973. Pedagang Sate Madura di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Marzali, Amri. 1973. Orang Silungkang di Jakarta: Latar Belakang dan Fungsi Konflik dalam Sistim Kekerabatan Mereka. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra dan Kebudayaan, Universitas Gajah Mada.
- McGee, T. G. 1967. The Southeast Asian City: A Social Geography of the Primate Cities of Southeast Asia. London: G. Bell and Sons.
- pur City: Individual Adaptation to the City.
 In Migration and Urbanization: Models and

- Adaptive Strategies, edited by Brian M. Dutoit and Helen I. Safa. The Hague: Mouton Publishers.
- Mertens, Walter. 1976. Jakarta, a Country in a City: A Demographic Introduction to Jakarta. *Majalah Demografi Indonesia* 3(6): 50-109.
- Murad, Auda. 1980. Merantau: Outmigration in a Matrilineal Society of West Sumatra. Indonesian Population Monograph Series No. 3. Canberra: Department of Demography, Australian National University.
- Naim, Mochtar. 1979. Merantau: Pola Migrasi Suku Minangkabau. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Neumann, J. H. 1972. Sedjarah Batak-Karo: Sebuah Sumbangan. L. I. P. I. Seri Terdjemahan Karangan Belanda No. 2. Translated by Siahaan-Nababan. Djakarta: Bhratara.
- Pandjaitan, Nurmala Kartini. 1977. Kegiatan Dagang Inang-Inang: Kedudukan dan Peranannya dalam Keluarga dan Masyarakat Batak Toba di Jakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Panitia Musyawarah Besar Keluarga Sulit Air Sepakat Ke VII. 1981. Buku Petunjuk Musyawarah SAS Ke VII. Jakarta: Panitia Musyawarah Besar Keluarga Sulit Air Sepakat Ke VII.
- Pusat Organisasi Warganegeri Sulit Air. ca. 1957. Buku Peringatan Konperensi Negeri Tradisionil ke-V. Djakarta: Panitya Konperensi Negeri Tradisionil ke-V.
- Roosmalawati. 1979. Migrasi Orang Bugis ke Jakarta: Suatu Pendekatan Antropologis mengenai Masalah Pola Perpindahan Orang-Orang Bugis keluar Daerah Asalnya. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Schnitger, F. M. 1939. Forgotten Kingdoms in Sumatra. Leiden: E. J. Brill.
- Sis, Maulud Tumenggung. 1970. Mapalus Orang-Orang Minahasa di Djakarta. Unpublished M. A. Thesis. Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Speare, Alden, Jr. 1975. Interpreting the Migration Data from the 1971 Census. *Majalah Demografi Indonesia* 2(3): 66-85.
- Suparlan, Parsudi. 1963. Masyarakat Sangir Talaud di Tanjung Priuk: Dengan Latar Belakang Masyarakat Sangir Talaud di Sangir Talaud. Unpublished M. A. Thesis.

- Fakultas Sastra, Universitas Indonesia.
- Szekeley-Lulofs, M. H. 1954. *Tjoet Nja Din:* Riwajat Hidup Seorang Puteri Atjeh. Translated by Abdoel Moeis. Djakarta: Chailan Sjamsoe.
- Thailand, National Statistical Office. ca. 1972. Statistical Yearbook Thailand Number 29 1970–1971. Bangkok: National Statistical Office.
- 東南アジア調査会(編). 1972. 『東南アジア要覧 1972年版』東京: 東南アジア調査会.
- Travellers' Official Information Bureau of Netherlands India. N. d. Sumatra. Batavia: Travellers' Official Information Bureau of Netherlands India.
- 坪内良博; 石井米雄. 1982. 「郵便家屋台帳から みた19世紀末のバンコク人ロ――予備的考察 ――」『東南アジア研究』20(2): 307-316.
- Wirth, Louis. 1938. Urbanism as a Way of Life. *The American Journal of Sociology* 44(1): 1-24.